

丹波焼の里 ミュゼシター

発行：やきものの里プロデュース倶楽部

2023
spring
summer

vol.
33

丹波の手仕事 匠の技 19
丹水窯「流し掛け」 田中 茂氏 聡氏

兵庫陶芸美術館
弓場紀知元副館長を偲んで

『逸品!』 兵庫陶芸美術館
学芸員 私のオススメ作品

インタビュー
篠山焼 二代の物語 今村静斎
今村 俊明氏



田中 茂 作 流釉大皿 窯変花入



丹水窯 田中 茂・聡

〒669-2113

兵庫県丹波篠山市今田町上立杭篠尾口2-5

電話 079-597-2371

文・吉村美穂子 写真・迫田隆

七代目の聡氏は、京都の訓練校や試験場で学ばれ、丹波に帰って来られました。両親からは「跡継ぎ」と言われたことはないが、陶芸に興味を持ち自然に焼き物に携わるようになったと話されます。

聡氏は粉引の味わいのある器づくりをされています。粉引釉の模索と実験を繰り返して、自分なりの粉引の色や肌触りになるよう工夫されています。今後は化粧土を使い何か面白いものを作り、若い人にも楽しく使ってもらえる、オリジナルブランドの作品を考えていきたいと熱く語られます。

ギャラリー内には茂氏の流し掛けの大皿や、焼締めの花器など伝統的な作品に、聡氏の現代的な個性溢れる器が並んでいて、時間を忘れるほどに楽しめます。

丹水窯では登窯焼成の作品も多くあり「焰（ほむら）」が変化してとても美しく、一つひとつの作品が違って大好き」と話されますが、現在の焼成はガス窯や電気窯が主となります。



田中 聡 作 粉引シリーズ

丹水窯は県道292号沿い上立杭地区の中心に位置する丹波焼の窯元です。六代目となる茂氏は昭和44年から3年間大上昇氏の元で修業し、その後は五代目からも指導をうけました。

「流し掛け」とは釉薬の掛け方技法の一つで、浸し掛け等で施釉のあと、柄杓で別の釉薬を流し掛けることで、斑文や流文などが出て、焼き上がりの模様の変化や景色を築く事が出来る技法です。流し掛けの釉薬は海鼠（なまこ）釉で、木炭・藁・粉を燻炭にして、長石や珪酸等を混ぜて作り、流し掛けます。色合いを出すのに何度も色見本を試作して、好みの色を作り青白い色や赤い色が出た時は、大変嬉しいと言われます。以前は徳利や花入れ・大皿など大きな作品に流し掛けをしていましたが、最近では家庭で使う食器も変化して、小ぶりのものの方が用途も多く作品も小さくなってきています。



丹波の手仕事

匠の技 19

丹水窯「流し掛け」 田中 茂氏・聡氏

弓場紀知元副館長を偲んで

兵庫陶芸美術館 仁尾 一人

平成17年10月、日本六古窯の一つに数えられる丹波焼の里に兵庫陶芸美術館が開館して以降、副館長として、学芸課員の指導を中心に陶芸美術館の運営にも尽力いただいた弓場紀知氏(以下、弓場副館長)が逝去されて(享年75歳、約半年が過ぎようとしています。

私が弓場副館長と初めてお会いしたのは、陶芸美術館が開館してまもない「やきものふるさと丹波」展を観覧し、真新しい学芸課で雑談をしていたさなかつたときと記憶しています。当時、私は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所(現兵庫県立考古博物館)に所属し、丹波焼に高い関心があったわけではありませんでした。むしろ、陶芸美術館で丹波焼に次いで収蔵件数の多い珉平焼に興味をもっていました。それは、平成15年に珉平焼窯跡の発掘調査を行い(調査では明治期に操業していた薪を乾燥させるコウカシ窯と作業場跡を発見)、約一千箱に及ぶ出土遺物の整理作業を担当したことによるものでした。弓場副館長からは、「よくもまあ、明治以降の大量の遺物を整理して、分厚い報告書をつくったなあ」と呆れたように言われましたが、後に奈良県生まれの弓場副館長は、奈良教育大学を卒業後、九州大学大学院に進まれ、入学早々「海(の正倉院)」と呼ばれた沖ノ島(福岡県宗像市)の第三次調査に参加された考古学者と知り、呆れの中には少なからず面白がられていたのではないかと、この思いがありました。



その後、陶芸美術館に異動とな

り、10周年記念の「丹波焼」展を担当しましたが、開館以来となる他館の名品を紹介するにあたり、まったく面識のない私立美術館が所蔵されている丹波焼の調査・借用を躊躇っていると、「いつ、どこそで、その館長と会うから、お前も来い」とお声掛けいただき、館長を通して、担当の学芸員を紹介していただきました。また、借用交渉が難航していた美術館には何度も一緒に足を運んでいただき、希望する作品を借用することができたのは、ひとえに弓場副館長のお力によるものであったと思っています。

いつも飄々としていながら、辛口な言葉が多い弓場副館長とは週に一度、学芸課で顔を会わせることが当たり前のようになり過ぎていましたが、体調を崩されて以降は、新しいコロナウイルスの影響もあり、お会いする機会のないままお別れとなってしまうしました。出光美術館の学芸員、出光美術館(大阪)の館長代理を経て、京都橘女子大学教授も勤められた弓場副館長は、中国陶磁の研究者であり、個人的には著書『青花の道』にサインをお願いした時、よこんで一筆いただいたことも思い出のひとつとしてよみがえってきます。

写真は、学芸課の誰もが思い出す、お酒を片手に終始、こ機嫌で笑顔な弓場副館長です。言葉では言い尽くせないほど多くのご指導をいただき、ありがとうございます。

おめでとうございます

令和4年度日本伝統工芸士会功労者表彰

大上 巧氏(大熊窯)

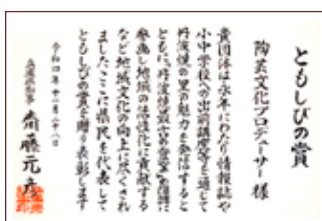
兵庫県技能顕功賞受賞

大上 正行氏(窯元やまの)

市野 克明氏(信水窯)

ともしびの賞 受賞

昨年11月、陶芸文化プロデューサーは、当情報誌や出前講座などを通じ丹波焼の里を広報し、最古の登り窯復興に参画したことなどが兵庫県から評価され「ともしびの賞」を受賞しました。今後も美術館、窯元などと協働し、丹波焼の里を盛り上げて参ります。



小学校での出前授業

兵庫陶芸美術館創設「YH賞」第2回受賞作品決定

昨年創設の「YH賞」の第2回受賞作品が、田中悠氏(一九八九年)の《Tsutsumimono》(二〇二二年)に決定しました。田中氏は、袋型のユニークな作品で知られ、近年は木箱に収める陶磁器を包むに定番の「ウコン布」の黄色を用いた作品を展開しています。



包まれたものの形に沿って生まれる布の柔らかなドレープの美しさ、土を手捻りする事で生まれるフォルムを突き詰め、内と外のどちら

も徹底的に仕上げていくことで、独自のしなやかさと力強い造形を見せています。

「逸品!」兵庫陶芸美術館 学芸員 私のおススメ作品



丹波
「灰釉手桶形水指 銘 日本海」
江戸時代前期(17世紀)
兵庫陶芸美術館(田中寛コレクション)
兵庫県指定重要有形文化財
「丹波の茶道具」展に出品

中世を通じて無釉の焼締陶器の生産に終始した丹波焼は、近世を迎えると赤土部や灰釉などの装飾技法で器面を彩り、他の産地と同様に茶陶と呼ばれる茶の湯のためのやきものを作るようになります。丹波の茶陶には、筒形で内部に水を溜め置く水指や花入などが多く、水指には木製の手桶に倣ったものに優品があります。

本作は、粘土紐を巻き上げて成形しています。胴の上部と下部には、金属製の箍(たが)を表現した細い粘土の紐を貼り付け、胴部にはヘラで木目を表現した波状の線を横方向に引いています。持ち手は、板状にした粘土を鋭い刃物などで切り、木材の角を忠実に表現しようとしています。やや厚く歪みが残る造形に灰釉を刷毛塗りしていることから、丹波で施釉技術が導入された元和年間(一六二五〜一六四四)以降に作られました。

古い茶会の記録を見ると、天文から天正年間(一五三二〜一五九二)にかけて、手桶が水指として頻りに使われています。これには「手桶」としか書かれておらず詳細は不明ですが、多くは木地または漆塗の木製品であったと推測されます。茶会における木製品の手桶の使用の増加が、その後、陶磁器製の手桶形水指が作られる要因になったと考えられ、丹波だけでなく備前などの作例も知られています。本作の箱蓋裏には「左丹波手桶水指」と箱蓋裏には「日本海/花押」とあり、表千家十三代即中斎宗左(一九〇一〜一九七九)が墨書きした箱が添っています。

学芸員 萩原 英子

源泉かけ流しの日帰り天然温泉



緑に囲まれた広い露天風呂で
ゆったり、のんびり、ほかほか。
農産物直売所、軽食コーナーも併設、
1日ゆっくりお過ごしください。



◆ 入浴料 ◆
大人 700 円
(中学生以上)
小人 300 円
(小学生)
※小学生未満 無料

営業時間
AM10:00 ~ PM9:00 (PM8:30 受付終了)
※営業時間は変更になることがあります。

定休日 毎週火曜日(祝日は営業)
〒669-2153
兵庫県丹波篠山市今田町今田新田 21-10
TEL.079-590-3377

<http://yume-konda.com/>



篠山焼 二代の物語

—— 初代 二代 今村静斎 ——

陶々菴 当主 今村 俊明氏

年	譜
1890(明治23)年	今村源太郎の長男として誕生
1911(明治44)年	高橋道八の門に入る 京都市陶磁器試験場に入る
1913(大正 2)年	篠山町西町に築窯し篠山焼開始
1917(大正 6)年	第8回日本産業博覧会優等賞
1920(大正 9)年	農商務省工芸品展覧会優等賞
1922(大正11)年	初代病没 父二代目静斎を襲名
1935(昭和10)年	二代目静斎東京で倒れ病没



「初代今村静斎没後百年 篠山焼 二代の物語」展が昨年丹波篠山市立歴史美術館で開催されました。初代静斎の孫にあたる今村俊明氏にお話を伺いました。

初代が篠山焼を始められたいきさつなどを話したいだけだと思います。

祖父に当たる初代今村静斎は、私が生まれるずっと前に32歳で亡くなってしまっているのですが、祖父といっても会ったことはなく、仏間に飾ってある写真を見て、「あれがひいじいさんとおじいさんよ」と親から言われていただけでリアル感がありませんでした。ほかに残されているのは、茶器などの作品と書物、文書類、それに登り窯だけなんです。

初代静斎は篠山出身の画家、平尾竹霞さんの紹介で、京都市陶芸試験場入門し、京都の高橋道八に師事できたようです。一九一三年に篠山に帰って篠山焼を始めました。今回、蔵の中に入って何があるかというところから始まりました。あらためて作品を見ると、象嵌の技法を取り入れた三島手などの茶陶を中心とした多くの作品を、病没までの短い間に集中的に焼いているというのがよく分かりましたが、残されたものを本人の気持を想像しながら見ると、プロセスの繰り返しでしたね。とにかく初代は芸術家タイプだったのではないかと思っています。



初代 今村静斎

初代没後に、父親の源太郎氏が二代目静斎を名乗って焼き物を始められたのは、

二代目は豪放磊落な商人だった

ようです。家業は味噌と醤油の醸造、それと米穀商を営んでいました。そのため人脈が豊富で、有名人とも茶の湯や書画での交流があったようです。初代は研究熱心で、数年の間に、才能を開花していったのですが、陶芸に集中し始めた途中から、二代目が商売を辞めているんです。初代が亡くなったときにいただいた手紙には初代の急逝へのお悔やみ、初代の遺志を継いで、是非篠山焼を続けてほしいと書いてあります。そういう励ましの言葉に発奮して始めたのだと思います。そのときは66歳でした。それから瀬戸で修行しています。昭和10年一九三五年に79歳で亡くなるまで、茶陶を主に、「たんなば」と銘を入れて二代静斎として作陶に打ち込みました。



二代 今村静斎

皆さんに「篠山焼」のことを知っていただこうと思ったのはいつ頃かなんですか。

今でこそ登り窯がよく見えて開けた庭になっていますが、その当時は醤油と味噌の元醸造蔵が建っていて、登り窯は殆ど見えませんでした。二代静斎が亡くなってからは登り窯で焼く人もなく雑草が鬱蒼として、この地で「篠山焼」が焼かれていたことも人々には知られていませんでした。

自宅を建てることになったのは、阪神大震災の翌年でした。その時に味噌・醤油の醸造蔵を解体することになり、中にあった作品の整理が大変でした。蔵や倉庫から搬出した作品を段ボール箱に詰めましたが、数えると三〇〇箱ほどになりました。



篠山焼 登り窯

それから、しばらくして二〇〇九年の篠山城築城四百年祭の頃から古民家や古い町並みを大切にしたいまちづくりをしようという運動が一緒に起り私も誘われて古民家の再生活用事業を手がけるNPO法人に入りました。篠山には歴史的な文化遺産が残っているから、むやみに取り壊さずに大切に活用したり城下町の中を、おいしいお店巡りをしようとか、とどこに残っている見どころを歩こうという町歩きムーブメントもあって、その時に、たまたま私の実家に登り窯があることを話したら、「それは是非一度見せてほしい」というリクエストがあった、初めて公開しました。それから徐々に知られるようになりました。

今村家が国の登録有形文化財に登録されたのは、何年でしたか。

二〇二一年二月のことです。「今村さんは古民家再生ウィルスに罹ったんやね」と(笑)。最初から古民家に興味があったわけではなかったから、そう言われました。このムーブメントに私自身が入ってしまったから、「君の実家、充分古民家やないか。ひと様の古民家を大



今村家 陶々菴

切にしようと言っている場合やないで」と言われて、維持するのは大変だしどうしようかと悩んでいるところに登録申請の提案をいただきました。「陶々菴」は、初代、二代静斎が付けていた呼称です。

篠山焼について、これから先どうしていきたいと思われませんか。

今回の展覧会に当たって今まで混沌としていた作品や資料がある程度分類できて、皆さんに見ていただくようになった。やっとスタート地点に立ったところだと思っています。まだまだ分からないことがたくさん残っており、手紙、文書類や写真などを解明していくこと、やはり私自身が元気な間にもう少し踏み込んで、できるだけ明らかにしていくことが子孫に伝えるための次のフェーズかと思っています。ファミリーヒストリーを探究していくというのは、とても興味深いものです。後は、何らかの形で、社会のお役に立てるようにできればと思っています。

本日はお忙しいなか、いろいろと貴重なお話をお聞かせいただきありがとうございます。



二代作 三島手茶碗



初代作 象嵌雲鶴文壺

陶々菴 HP <https://to-to-an.com>

取材・写真 迫田 隆

●特別展のご案内

丹波の茶道具

3月18日(土)～5月28日(日)

近世をむかえると、他の産地と同様に丹波でも茶道具を作り始めます。本展では、各時代の茶人に受け継がれ、愛蔵されてきた丹波の茶道具の魅力に迫ります。加えて、茶室の空間を再現し、県内の窯場で焼かれたさまざまな道具を取り合わせて、茶の湯の世界の一端を紹介します。

丹波《灰軸手桶形水指》
江戸時代前期
兵庫陶芸美術館



日本工芸会陶芸部会50周年記念展

未来へつなぐ陶芸 - 伝統工芸のチカラ展 -

9月9日(土)～11月26日(日)

これまで日本の伝統工芸を牽引してきた日本工芸会陶芸部会の活動が2022年に50周年を迎えました。それを記念して開催される本展では、伝統陶芸のこれまでのあゆみと未来へとつなぐ技と美を、歴代の人間国宝の作品から新進作家らの最新作まで137名の139作品によって紹介します。



石橋裕史《彩刻磁鉢 滲漚》2011年
兵庫陶芸美術館

●テーマ展のご案内

デミタスカップの愉しみ

6月10日(土)～8月27日(日)

デミタスは、少量のコーヒーを飲む時に使う小さなカップです。本展は、2000点を超える村上和美氏の所蔵品の中から、19～20世紀に欧州の名窯が生み出したジャポニスム、アール・ヌーヴォー、アール・デコのデザインなど当時の流行を反映した作品を中心に、珠玉の約380点を紹介します。

ロイヤルウスター(ジョージ・オーウェン)
《金彩ジュール透かし彫りカップ&ソーサー》1880年頃
村上和美氏蔵



丹波焼の世界 season 7

3月11日(土)～2024年2月25日(日)

2017年、日本六古窯の一つとして日本遺産に認定された丹波焼は、平安時代末期以降、800年以上にわたり時代の求めに応じて、変化しながら作り続けられてきました。緑色の自然釉が美しい中世の壺から多彩な器面装飾が展開された近世の徳利や皿など、丹波焼の歴史を一望します。

丹波《壺》
室町時代後期
兵庫陶芸美術館



兵庫陶芸美術館 〒669-2135 兵庫県丹波篠山市今田町上立杭4 電話：079-597-3961 (代表) HP <https://www.mcart.jp>

丹波焼の里情報コーナーのご案内

「丹波焼 茶のうつわ」

3月17日(金)～5月28日(日)

兵庫陶芸美術館 展示棟入口横 観覧無料
企画：陶芸文化プロデューサー
協力：丹波焼窯元等

プレゼントのお知らせ

兵庫陶芸美術館・陶の郷・こんだ薬師温泉の招待券を3施設セットでペア5組10名様にプレゼント。

●応募方法
ハガキに 〒住所・氏名・年齢・本紙の入手場所(〇〇美術館など)・ご意見、ご感想をご記入の上、下記の宛先までお送りください。

●締め切り
8月末日消印有効。応募多数の場合は抽選。

●宛先
〒669-2135 丹波篠山市今田町上立杭4
兵庫陶芸美術館内「陶芸文化プロデューサー」宛
なお、ご応募頂いた方の個人情報当選者への発送、本紙企画の参考以外の目的には使用いたしません。また当選発表は発送をもってかえさせていただきます。

イベント 丹波焼「春の軽トラ市」
4月29日(土・祝)10時～16時
兵庫陶芸美術館入口周辺

▼問合せ 兵庫陶芸美術館
電話：079-597-3961

※春ものがたり期間中は、展覧会観覧料を特別割引
一般1200円→900円
大学生900円→700円
70歳以上600円→450円、高校生以下無料

《兵庫陶芸美術館》

ギャラリートーク・体験コーナー・マルシェ・お楽しみ抽選会など

▼問合せ 丹波立杭陶磁器協同組合
電話：079-597-2034

※春ものがたり期間中は、立杭陶の郷入園無料

※窯元開放工房、最古の登窯焼成(5/25/4)、スタンプリング、グループ窯作陶展など

●会場

立杭陶の郷、各窯元、兵庫陶芸美術館など

●内容

午前10時～午後4時まで

期間 5月3日(水・祝)～5月5日(金・祝) 3日間

トを開催します。

◆第17回「やきものの里 春ものがたり」
緑豊かな自然に囲まれたやきものの里で、様々なイベントを開催します。

イベント案内

丹波伝統工芸公園

立杭 陶の郷

〒669-2135 兵庫県丹波篠山市今田町上立杭3
TEL.079-597-2034 FAX.079-597-3232
URL.<https://tanbayaki.com>

【入園料】高校生以上 200円

小中学生 50円

【開園時間】AM10:00～PM5:00 (通年)

【休園日】年末年始

毎週火曜日

(但し、祝日は営業します。)

丹波焼を『見る・作る・楽しむ』

窯元横丁

丹波焼の50軒の窯元の作品を買うことが出来る「窯元横丁」。どこか懐かしくあたたかな空間で、ゆったりと買い物をお楽しみいただけます。伝統的な丹波焼からアーティスティックな作品まで、さまざまなやきものが展示販売されています。一つひとつの作品をじっくり手にとりながら、散歩気分で歩いてみてください。見ているだけでも楽しくなりますよ。

陶芸教室

丹波焼の郷で、陶芸体験してみませんか。小さなお子様からどなたでも、手びねり(粘土細工)や絵付け体験に挑戦していただけます。釉薬をかけて焼き上げてから、ご自宅まで宅配便で発送いたします。あなただけのオリジナルやきものをつくってみるのも楽しいですよ。